

蒼鷲たかの飛ぶ時よそみ他所視はなさず、鶴つがなら鶴の一点張りに雲をも穿ち風にも逆つて目ざす獲物の、咽喉むか仏ひつつか把攬つらまでは合点せざるものなり。十兵衛いよいよ五重塔の工事しごとするに定まつてより寐ても起きても其事それ三昧ざんまい、朝の飯喫ふにも心の中では塔を噬かみ、夜の夢結ぶにも魂魄たましいは九輪の頂を繞るほどなれば、況して仕事にかゝつては妻あることも忘れ果て児のあることも忘れ果て、昨日の我を念頭に浮べもせず明日の我を想ひもなさず、唯一ちゆうなト斬なりあげて木を伐るときは満身の力を其に籠め、一枚の図をひく時には一心の誠を其に注ぎ、五尺の身体こそ犬鳴き鶏歌ひ權兵衛が家に吉慶よきひびあれば木工右衛門が所に悲哀ある俗世に在りもすれ、精神は紛たる因縁いん縁に奪とられで必死とばかり勤め励めば、前の夜源太に面白からず思はれしことの気にかゝらぬにはあらざれど、日頃のつそり益々長じて、既何処にか風吹きたりし位に自然軽う取り做し、頓ては頓と打ち忘れ、唯々仕事にのみ掛りしは愚かなるだけ情に鈍くて、一条道より外へは駈おいつしけぬ老牛の痴に似たりけり。

金箔銀箔瑠璃真珠水精以上合せて五宝、丁子沈香白膠薰陸白檀以上合せて五香、其他五葉五穀まで備へて大土祖神埴山彦神埴山媛神あらゆる鎮護の神々を祭る地鎮の式もすみ、地曳土取故障なく、さて龍いし伏は其月の生氣の方より右旋りに次第据え行き五星を祭り、斬初めの大礼には鍛冶の道をば創められしすえあまあまままひひつつみみことこと天の目一箇の命、番匠の道關かれし手置帆負の命彦狭知の命より思兼の命天児屋根の命太玉の命、木の神といふ句々廻馳の神まで七神祭りて、其次の清匏の礼も首尾よく済み、東方提頭とうほうたいとうだいしゆく頼吒持國天王、西方尾嚙びろしゃうもく又廣目天王、南方毘留勒なんほうびるろしゃ又增長天、北方毘沙門多聞天王、四天にかたどる四方の柱千年萬年動ゆるくなと祈り定むる柱立式、天星色星多願の玉女三神、貪狼巨門等北斗の七星を祭りて願ふ永久安護、順に柱はしらだての仮轄かりくさびを三ツづゝ打つて脇司わきつかさに打ち緊めさする十兵衛は、幾千の苦心も此所まで運べば垢穢きたなきかお顔にも光の出るほど喜よろこび悦いついに氣の勇み立ち、動きなき下津盤根しもついわねの太柱と式にて唱ふる古歌さへも、何とはなしにつくづく嬉しく、身を立つる世のためしぞと其下しもの句を吟ずるにも莞爾にこにこしつつ二度し、壇に向むかひて礼拝恭み、拍手の音清く響かし一切成就の袂を終る此所の光景ひまには引きかへて、源太が家の物淋しき。

主人は男の心強く思ひを外には現さねど、お吉は何程さばけたりとて流石女の胸小さく、出入るものに感応寺の塔の地曳はしらだての今日済みたり柱立式昨日済みしと聞く度ほどことに忌々敷、嫉妬ほむらの火炎衝き上がりて、汝十兵衛恩知らずめ、良人の心の広いのをよい事にして付上り、うまうま名を揚げ身を立るか、よし名の揚り身の立たば差詰礼にも来べき筈を、知らぬ顔して鼻高々と其日其日を送りくさる歎、余りに性質ひとの好過ぎたる良人も良人なら面憎きのつそりめもまたのつそりめと、折にふれては八重縦横に癩癩の虫跳ね廻らし、自己おのが小鬢の後毛上げても、ゑゝ焦つたいと罪の無き髪を搔きむしり、一文貰ひに乞食が来ても甲張り声に酷く謝絶りなどしけるが、或日源太が不在ゐるすのところへ心易き医者道益といふ饒舌坊主遊びに來りて、四方八方の話の末、或人に連れられて過般蓬萊屋このあいだへまゐりましたが、お傳といふ女からきゝました一分始終、いやどうも此方の棟梁は違つたもの、えらいもの、男児は左様あり度と感服いたしました、と御世辞半分何の気なしに云ひ出でし詞を、手繰つて其夜の仔細をきけば、知らずに居てさへ口惜しきに知つては重々憎き十兵衛、お吉いよいよ腹を立ちぬ。